

平成 29 年度男女共同参画センターはあもにい 第 1 回運営審議会 議事録

1. 日時 平成 29 年 7 月 3 日 (月) 午後 1:00～
2. 場所 熊本市男女共同参画センターはあもにい 4F 会議室
3. 出席者

運営審議会委員 (8 名)

井手志保委員、伊藤一敏委員、石井美代子委員、坂口京子委員、中山敏子委員、
那須円委員、広渡純子委員、八幡彩子委員 (五十音順)

熊本市 市民局 市民生活部 男女共同参画課 課長 東原福美

事務局 代表企業 A 尾池千佳子 (九州総合サービス株式会社代表取締役)
上村浩二 (九州総合サービス株式会社専務取締役)

構成企業 B 小山雄治 (熊本産業文化振興株式会社常務取締役)
河野正治 (熊本産業文化振興株式会社総務部長)

構成企業 C 藤井宥貴子 (有限会社ミュージズプランニング代表取締役
兼はあもにい館長)

坂本ミオ (有限会社ミュージズプランニング取締役副社長)

副館長：伊井純子

総務管理課：梅田勝也、吉田寛、反後文代、杉卓倫、富岡若菜、田中美帆、緒方一茂
維持管理課：安藤陽介

4. 会次第および議事内容
 - (1) 開会
 - (2) 開会あいさつ (館長：藤井宥貴子)
 - (3) 代表あいさつ (はあもにい管理運営共同企業体代表 尾池千佳子)
 - (4) 審議会委員および出席者紹介
 - (5) 審議
 - 議題 1 はあもにい管理運営状況報告
利用状況報告
 - 議題 2 平成 28 年度実施事業について (映像で紹介)
 - 議題 3 平成 29 年度事業方針、事業計画について
 - 議題 4 その他

5. 特記事項

平成 29 年度より石井美代子氏および宮村飛伸氏が新たに就任。※宮村委員は当日欠席
また、審議会会長に八幡委員、副会長に広渡委員が推薦され、議会承認となった。

6. 議事録

議題 1・議題 2 についての質疑応答

伊藤：「第 4 回ミモザフェスティバル」は、男女共同参画の一環として上通で活発な呼びかけをされて、販売等されていたようだが、結果はどうだったのか。たくさんアンケートもとられたでしょう。

反後：事業概要の 43 ページに詳細がある通り、クイズラリーは 487 名が参加。ホワイトトリボン参加者からは、「同じ思いを持った人とつながる気持ちを持つことができ良かった」という感想が聞かれた（アンケートより）。クイズラリーは、基本的な男女共同参画に関するクイズの問題を出し、回答した人は、楽しみながら男女共同参画に触れられたのではないかと感じている。多くの方に参加いただいて、身近に感じていただけた。

伊藤：校区では、男女共同参画という言葉自体が「はあ？」といった感じ。行政相談の一環でチラシを各家庭に配り、黒髪のコミュニティーセンターで月に 1 回相談会をしていて、はあもにいでもしている。男女共同参画という名目で相談会をしても、なかなか、相談にお見えになる方が非常に少ない。もうちょっと何とかしなくちゃいけないというのが今からの自分の課題。何かいい考えがあったら教えてほしい。

藤井：おっしゃったことは、私たちの会館にとっても 1 つの課題。上通に出ていったのは、会館で待っているだけでは限られた方しか来ないという課題があったので、私たちの方から出て行って、少し楽しいことを交えながら、面白そうなことをやっているね、と、気が付いたら男女共同参画を学んでいた、というような意味合いでミモザフェスティバルを行っている。5 回のうち、中心街に出たのは 2 回目。男女共同参画＝難しいことではなくて、身近にそういった課題がたくさんあることに気づいていただきたいために実施している。みなさんに近いところから呼びかけていくことがポイントと考え取り組んでいる。

伊藤：非常に難しい。行政相談の男女共同参画担当委員として全国の研修会が東京で毎年ある。各県から 2 名ずつ出ているが、全国的に盛り上がりが少ない。総務省の方も頑張ってもらいたい。

藤井：防災をテーマにした男女共同参画の講座であれば、男性の方の参加も多いと感じている。そういった切り口でアプローチするのも 1 つの方法だと思う。

八幡：はあもにいは地元の黒髪地区との連携と、ミモザフェスティバルのように中心街に出での取り組みといったような各方面にわたって活動をしており、まちなぎわいの創出にも一役買っているかと思うが、そのあたりも含めて新しく委員となった石井委員いかがでしょうか。

石井：私がミモザフェスティバルを初めて拝見したのは、上通で行われた時。「これはなんだろう」という感じで拝見した。男女共同参画であるというのは分からなかったが、女性を支援しているということは分かった。いろいろ女性の団体がたくさんいらっしゃるのだということ、たとえば、女性リーダー協議会というものがあるということも知らなかった。

女性だけのネットワークが必要だと思った。私たちはDV防止啓発をボランティア団体で11月にやっているが、ミモザフェスティバルは3月にそれぞれやっているけど、もう少し連携があってもいいのかなと思った。女性の社会進出が最近どんどん取り組まれているが、共同参画というのは結局、女性のレベルアップを目的としているのか。それとも社会における平等性を目的としているのか、目標としているところが分かりづらいと思った。そういうところを分かりやすくしてくださるとお話ししやすいかなと思う。

八幡：はあもにいが実施している事業については、新年度の方でどういう事業の枠組みがあって、それに従って何を目指して実施しているか、あとで説明があると思うが、市民の団体とのネットワークの実績について、先ほどの質問に何かお答えいただけるか。

藤井：1期目に関しては、はあもにいに登録している団体とうまくつながっていくことを主に取り組んできた。熊本地震があつてからはもう少しそのネットワークを広げていくことが重要だと痛感した。他の分野にもお声かけをしたり、外に出ていったりすることで、情報提供・共有・交換に努めていきたいと思っている。

那須：先ほどご説明にあった、高校生らしい人権に関する意見を具体的に知りたいというのが1点と、地震を通じて男女共同参画の視点での防災というのが一体どういうものか説明がほしい。新年度の取り組みの説明の中であるなら、その時に聞かせてほしい。

田中：高校生らしいとは、女子生徒から「かわいらしさは年齢とともに衰えていくが、かしこさはずっと残る」と、男子生徒からは「対応する相手が女性だと恥ずかしいこともあり、同性のほうがいいこともある」という意見があつた。たとえば避難所対応などで恥ずかしさを感じることもある。はあもにいの催しで毎年、男女共同参画に関するクイズラリーを行っており、問いかけの中に「男が泣くは男らしくない、○か×か」という内容があるが、高校生は柔軟かつストレートで、「男でも泣きますよ」という意見が聞かれたと報告を受けた。中山さんがその場にいらっしゃつたので、お話を伺いたい。

中山：今の高校生は、自分の思いを自分の言葉で話す。男子生徒が女の子に対して、こういうことをあまり言わない方がいいということはないみたいだ。思ったことはズバツと言う。担当の先生からは「自分も長く教師をしているが、私自身も勉強になりました」と感想をいただいた。アンケートを取っているので、アンケートの結果を差し上げてもよいかなと思う。自分の思いを自分の言葉で話すということに感動したし、高校生を対象にした事業を今後も続けていきたい。

井手：ウィメンズカレッジを受講したことがあるが、今年も好評でスタートしているというのは、企業に働きかけての結果なのか、広報に呼びかけての結果なのか、集客に関して教えていただきたい。

反後：広報は、毎年幅広くやっている。直接、企業や経済団体にもアプローチしている。学校関係、小学校、中学校、高校の職員の参加を促すこともある。この分野だけ、とせず、幅広く広報している。昨年度、熊本市の男女共同参画課が主催した「働く女性の交流大会」の参加者にDMでご案内し、それが効果的だったので。関心を持つ個人に届いたのかなと

思う。

坂口：熊本地震を受けて、災害、防災、復興というキーワードがたくさんあるにも関わらず、少しずつそれが薄れてきていることを感じている。昨年度のはあもにいの事業のシンポジウム「災害と女の子」、高校生を対象とした人権ワークショップなどを通し、若い世代が、地震を受けて男女関係なく何ができるのかなと考えてくれたのも熊本の大きな力になるのではと思っている。震災があつてから、全国的な、世界的な活動をしているたくさんの団体が熊本とつながった。こういったつながりがこれからの熊本に必要。これからの5年にかけても、少しずつ震災という点が薄れていく中で、はあもにいがこういった視点を持って活動してくれると心強いと思う。

中山：私が男女共同参画というと、「男性の生き方」とすぐなってしまうが、県の審議会の委員をしているときに、男性の委員から一斉に集中攻撃を受けるような思いがしていた。男性の意識もだいぶ変わってきた。トップの方もだいぶ変わったが、中間の方がまだ男女共同参画にはほど遠いのではないか。男女共同参画のテーマは広くて深い。嫁と姑は永遠のテーマといわれていたが、今は男女共同参画が永遠のテーマではないか。男性が生きやすい社会を目指して頑張っていきたい。

広渡：中山委員がおっしゃったように、女性のことを言うと、まだまだ厳しい点があると思う。女性支援がはあもにいの大きな目的としてあるが、平等性という点で女性ばかりでは解決しない。高校生の人権ワークショップ、ガールズ支援等本当にいい企画だったと思う。若い人たちの意識は働きかけで少しずつ変わっていくかなと思う。中高年の男性に対してどういう働きかけをしていくか、意識を持っていくか、というのを忘れてはいけないかなと思う。聞きたいのが、黒髪地区と碩台校区の地震報告集会を自主事業として行っていたが、はあもにいがこの地域で何ができるのかという課題は話せたのか。

反後：この報告会では、地震後に黒髪で起きたことを初めて知る機会となった。様々な団体の活動があり、様々な困難を乗り越えてきたのだと知った。黒髪校区にあるはあもにいとして、行政と共に何ができるのか検討を始めているところ。

広渡：大事なことだと思った。先のことはこれからだと理解した。それぞれで頑張っており組んでいるが、こうして報告をして、これから先は共有し、次は何ができるかということまで、落とし込むことがなかなか難しいと思う。

八幡：指定管理制度に移行する前の平成23年度というデータが提示されていないが、23年から24年は利用実績がかなりアップした状況でスタートしたと思う。どれだけ頑張ったという貴重な資料になると思う。毎年でなくてよいので、できたら記録として資料に残してもらおうと、市民から目に見える成果になるのではないかな。管理状況も対前年比で伸び率が書いているが、5年間ではもっと伸びがあるはずなので、総括もあげていただければ、いかに頑張っているのかももっと分かるのではないかなと思う。熊本地震でマイナスの影響を被ったのかも含め、こうした足跡、記録を残してもらえれば、事業の報告のための事業概要かもしれないが、市民の方や、研究に取り組む学生にも非常に貴重なデータとして活用で

きると思う。ホールがいつまで閉まっていたのか、どの部屋に何名受け入れたのかなど、もう少し避難所だったときのデータも記録として含めていただければよかったかなと思う。

避難所キャラバンのページや情報紙はあもにいも特徴的な内容だと思う。いろんな地震における問題点なども見えてきたと思うが、こういったことが今後の調査研究につながっていくと思う。非常に立派な事業概要なので、ぜひ次期事業に活かしていくものであってほしい。

石井: 今日参加して、はあもにいが地域の中に溶け込んでいることがよく分かった。お話を聞いていて地道な活動をしておられたということがはっきり分かったことだけでも、本当に良かった。

議題3 についての質疑応答

八幡: ウィメンズカレッジのチラシに、「希望者には、県外への男女共同参画に関する研修の費用の一部を助成」とあるが、こういった取り組みか教えていただきたい。

反後: 今年度初めての試み。男女共同参画社会の実現に資する人材の育成を目的とするので、国立女性教育会館などの県外の男女共同参画研修施設への派遣費用の一部助成を検討している。

八幡: 今年度の目玉事業を一つ上げるとしたら何かを教えていただきたい。

反後: 男女共同参画の視点からの防災出前講座。

八幡: 被災地支援や復興にかかわる団体の活動費の一部助成や地震に関するいろいろな調査も予定されているとのことで、結果が楽しみ。

広渡: 毎年、事業の計画をしっかりと立てていることがよく分かった。防災の人材育成講座は、震災を経験した地域ならではの取り組みとして期待したい。開催日について教えていただきたい。

反後: 防災出前講座は6月から行っている。人材育成の講座は、2月を予定している。防災の出前講座で、それぞれの場所や対象者によつての捉え方や反応を受けて、人材育成の内容を調整していきたい。

広渡: 熊本地震の際は、自分自身が被災しているにも関わらず、支援者としてできることを考えている人が多かった。そういうときにぱっと動けるように、その人がリーダーとして位置づけがされていることも大事だが、一般の私たちが、多様な人たちがいるという視点を持って、災害時に取り組みができることも大切。ぜひ多くの人々が防災出前講座を受けることができれば。被災したからこそできることを期待したい。

また、運営審議会資料「平成29年度開催講座の方向性」の方向性として、「貧困、引きこもり等、生きづらさを抱える女性の自立支援」と記載があったが、どこの事業にあたるのかが分からない。自分の職場のことでしか分からないが、まだまだ仮設住宅から通っている大学生もいる。いろいろと困難な状況に置かれている。その中で、一番しわ寄せが来ていると感じるのは、ひとり親家庭の学生。社会的に弱い立場に置かれている人たちにし

わ寄せが来ると思う。こういう貧困等、生きづらさを抱える人々の相談の場の提供はされているのか。提供している場合、対象は熊本市在住か？　そういう取り組みができるか分からないが、未就学の子を持つお母さんたちへの調査は企画されているようなので、親全体だけではなく、支援が必要な世帯への視点も必要なのではないかと感じている。

東原：相談の場としては、熊本市では、はあもにい施設内に総合相談室を設けている。相談があったら、福祉の部署につないだり、DVについてはシェルターを紹介したり、法的な処置が必要な場合は、裁判所に同行したりすることもある。各区役所にも相談室があり、そちらでも対応している。DVの場合、住民票の住所を移さずに熊本市にきている人も多いため、ほかの相談機関と違い、相談者の住所は問わない。居場所が周辺市町村だった場合でも、どなたでも受けている。

広渡：総合相談室があるということを知らなかった。また、「貧困、引きこもり等、生きづらさを抱える女性の自立支援」について、具体的にどういった事業を想定されているのか、知りたくて質問した。

伊藤：民生委員をしている。貧困、青少年対策など、見てきたが、個人情報保護法ができてから支援が難しくなった。そのため現在、民生委員の仕事は、安否確認のみ。本当に厳しい時代が来ている。法律がなければ、子どもの問題もスムーズに解決できるが、地域では調べるのが難しいため、なかなか進まない。

東原：熊本市では、「男女共同参画基本計画」に基づいて事業展開を行っている。その中で、女性の起業・就業支援がある。具体的には、資格取得、再就職支援セミナー、起業支援セミナー、マザーズサロンとの連携、経済支援、母子自立支援プログラムなどの支援など。相談機関でニーズをくみとって、それらの情報を紹介するなどを行っている。

中山：第4期ウィメンズカレッジに越地さんが入れられたのは良かったと思う。誰もが聞きやすい。

坂口：4点気づいたことがある。一つ目：熊本地震に伴う「育児中の女性」に関する調査をすると聞いたが、保育園・幼稚園だけでなく、一時保育や小規模保育を利用している方や県外から来たシングルの方、専業主婦の方など、環境が違っているとニーズが変わると思うので、それを意識したアンケート集計をしていただければと思う。

二つ目：貧困も取り上げていただきたいテーマ。虐待サバイバーという言葉があるように、どのように虐待経験から乗り越えられたか、何が自分のサポートとなったかを発言し始めている当事者がいる。当事者の声とつながることが大切だと思うので、たくさんの方が参加できるものではなく、当事者がつながれたり、発言できたりする機会ができればいいと思った。

三つ目：今年度は、いろいろな団体が子ども食堂の取り組みを行っているようだ。震災後、発足したという団体が増えているので、そういった団体がつながれるような仕組みが必要なのではないか。

四つ目：中高年の男性は、思春期の子どもを持つ世代なので、親として、思春期の子ども

の対応に戸惑っている人もいるのでは。その家庭の中での男女共同参画について、息子や娘に自分の言葉で言える機会ができれば、それが社会に波及していくのではないかと考える。そういった思春期の子を持つ父親に限定して参加できるものがあればいいと思った。

八幡：今後の事業を組み立てる際に、ぜひ参考にさせていただきたい。今年度は、DV 加害者を対象とした事業は行わないのか。

反後：毎年、市民グループ企画として募集をして実施していた。今年度はその募集期間に応募がなかったため、実施の予定がない。毎年、参加者が少なく、最後まで継続的に参加する人も少ないことが課題の一つ。

八幡：取り組みとしては、意義のあることなので、継続して行うことで、波及効果が見込めるのでは。毎年でも実施していただければと思う。

反後：DV 加害者向けの講座については、前向きに検討したい。

井手：今年度もミモザフェスティバル開催とあるが、今年の構想は？

反後：未定のことが多い。昨年度は上通と二の丸広場まで出て、得られるものは大きかった。今年度も外に出て実施したいが、詳細については、もう少々お時間いただければと思う。

那須：貧困、引きこもり等、生きづらさを抱える女性の自立支援は大事だと思う。私自身、小学生の子どもを持つ親。PTA に関わる中で、子どもの非行、問題行動があったときに、家庭教育がなっていないという意見が多く聞かれる。そこで家庭環境が問題視されることは少ない。問題を社会的な共通認識にしていくためには、現状把握は必要だと思う。解決していくためには、行政・団体と連携していく必要があると思うが、貧困が子どもの行いにどう関連していくのかなど、分析しながら取り組みをしてほしい。

また、性の多様性、LGBT の問題についても、多くの市民に分かっていただく必要があるのではないと思う。今年度の講座のなかにあってもよかったのではないかな。

八幡：LGBT は、教科書にも取り上げられるようになってきたが、教師陣は、子どもたちにどう教えていくか迷いもある。ぜひ、はあもにいとしてできる取り組みをご検討いただければと思う。

反後：分かりました。

石井：DV に関する暴言が問題になった議員もあった。その背景には、何かトラウマがあるのではないかと考えた。自分自身の経験が知らないうちに DV につながっていく可能性がある。啓発が必要。

働き方改革が唱えられている時代。事業予定の中に企業の個別アプローチやテレワーク支援、助成金制度の創設などが書いてあるかと思う。この支援は具体的には、どういうことか。ウィメンズカレッジの対象は、個人のようなのだが、企業に対してはどうアプローチしているのか知りたい。

反後：企業への個別アプローチについては、ワーク・ライフ・バランスの出前講座を行う。ワーク・ライフ・バランスの実現に向けて、テレワークを通して企業へ多様な働き方を提

案していければと思う。

石井：周囲に女性の経営者が多い。よく話が出てくるのは、雇用者側と働く側がマッチングしていて、お互いに気持ちよく働いていけたらいいということ。熊本は中小零細企業が多い。どうやってうまくやっていけるか切実な問題。例えば、意識改革の支援なのか、具体的な支援なのか。

反後：まずは意識改革として支援をしていく。

東原：熊本市では、働く女性を対象とした事業を昨年度から実施している。「働く女性の大交流会」には、200名が参加。ロールモデルの確立として、異業種交流を行うなど、大変好評だった。今年も8月25日に実施予定。今後は働く女性のキャリアアップのための企業のアドバイザーを派遣予定。現状把握が必要ということで、3年に1回、「男女共同参画社会実現に向けた企業意識・実態調査」を実施している。今年度も1200社を対象とし、9月に実施、報告書は2月に完成予定。調査の際は有用な情報も同封し、情報提供を同時に行いたい。

伊藤：「男女共同参画」が謳われるのは、今の世情。町内において、学生のモラルが問題になっている。そういった学生へ、「男女共同参画」を教えるのは、難しいことなのではと心配している。その点については、どうか。

八幡：学生の交通やゴミ出しのルールが守れておらず、地域の方々には大変ご迷惑をかけている。「男女共同参画」については、入学する前から教育は受けてきている。ただし熊本大学の場合は、1学年6000名いるので、すべての学生に対して、「男女共同参画」が必修で位置づけられているかという点と違う。藤井館長に大学で話をしてもらおう機会も設けているが、そういったような形で少しでも学生に男女共同参画の意識が高まるような取り組みを大学でも実施していきたいと思う。

また、今年度に限り、事業数を変更するとあったが、地震の影響、施設の影響という理解で良いか。

反後：今年度は防災出前講座をできるだけ多く実施したいということで、社会参画支援事業を減らして、防災に注力している。

八幡：今年度、助成金を受けた団体がどう活動されるのか、調査の結果がどう出てくるのか、ぜひ報告を楽しみにしている。
